

第 12 回評議員会 報告

日時：2025 年 3 月 20 日（木）10：00～11：45

場所：東京国際フォーラム

出席者：藤井千春、長谷川真理子、竹本織太夫（以上評議員）

清村百合子（代表理事）、鉄口真理子、宮澤多英子、小川由美、三輪雅美（以上常任理事）

評議員会では、学会の運営体制はじめ、研究の方向性や日本の音楽教育が今後目指すべきものについて、外部委員の先生方から多様なご意見をいただくことを目的としています。

今回は「AI 時代における芸術教育、伝統芸能のあり方について」や「教育への AI 導入について」を主なテーマとして、さまざまな観点から自由闊達にご議論いただきました。

竹本織太夫氏からは、テクノロジーは伝統芸能の裾野を広げるという意味では有効に活用できる側面をもっているが、その使い方は考えなければならないというご提言がありました。一方で国立文楽劇場の演目の VR 体験の導入がリアルな文楽の体験への誘導として機能するという期待をもっておられるそうです。

藤井氏からは、教育への AI 導入に関して、AI は人間の「曖昧な部分」に対応できない、その曖昧さにこそ、子どもの成長の可能性があるのではないかというご指摘がありました。AI に切り捨てられた曖昧さにこそ、教育の営みの本質があるのではないかと。また芸術は表現者と鑑賞者のコミュニケーションによって成立するものであり、リアルなコミュニケーションにこそ、芸術ならではの意味があるのではないかと意見も出されました。

また自然人類学がご専門の長谷川氏からは、子どもがどう世界を知っていくか、という点に関しては、タブレット上の操作だけではダメで、人間の実体験がとても大事になってくるという意見が出されました。AI はあくまでも認知と記憶のみを取り出した働きであって、本当の「意味」は理解できていない。そこを理解するところにこそ人間の本質があると。また音楽や美術という感性による教育は、アルゴリズムでは描けない世界であり、芸術教育ではそういった感性や曖昧さ、気づきを上手く引き出す必要があるのではないかと語られました。

今回の評議員会は、30 周年シンポジウムのテーマでもある、AI 時代における学校音楽教育のあり方について、科学的見地や教育学的見地など、さまざまな観点から多くの示唆を得ることのできた大変有意義な会となりました。